
戦極姫 ～戦乱で沸き立つ大和魂～

ポートレス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦極姫 ～戦乱で沸き立つ大和魂～

【Nコード】

N5231V

【作者名】

ポートレス

【あらすじ】

「応仁の乱」に端を発する足利將軍家の衰退により朝廷の権威が失墜し、武力が全てとなった戦乱の時代、全国各地の群雄が割拠し、天下統一を目指して覇権を争い鎬をけずる。室町幕府まで続いた貴族主義の伝統と価値観は崩れ去り、く武力と知略があるものが天下に名を上げる。世の中で、人々は強者に付き従うようになっていく。

一人の青年が目を見ました。

一話　　ゝ志ある者は事竟に成るゝ

- - - 1945年3月26日、東京府小笠原支庁硫黄島村 - - -

「栗林大将、自決なさった模様です。」

「他の隊にも通信はつながらない……。となると残存兵力はこの天城隊だけか。」

大日本帝国陸軍尉官、天城颯馬は、地下壕で唇を噛み締めながら忌々しげに呟いた。

「弾も食糧も満足に戦えるほど残っておりませんが……」

「全員、ここに集めてくれ。今すぐに」

- - - - -

戦況を伝えたと天城隊50人はざわめいた。

目前まで迫っているアメリカ軍の牙。

その恐怖は計り知れない。

「皆、よくここまでもちこたえてくれた。アメリカ軍は当初、数日でこの硫黄島を制圧するつもりだったが、その計画を見事に打ち砕くことができた。これも栗林対象の采配と諸君らの頑張りのおかげだ。本当にありがとう。」

颯馬は配下の兵達に頭を下げた。

その颯馬の言葉と行動に兵達は笑顔を見せた。

「隊長の寝息はひどかったなあ、砲弾の爆音よりもうるさかったも

ん。」

「寝言もすごかったしな。」

「おまけに凄いドジだし。」

「好き嫌いも多いし。」

「朝起きるのも遅いし。」

次々と颯馬の欠点をマシンガンの如く並びたてる兵士達。

そんなに俺って駄目な奴？

すると一人の兵士が照れくさそうに頬を掻きながらこう言った。

「でも、そんな隊長だからこそ俺たちは頑張れたんですよ。」

その言葉に次々と同意の言葉が挙がる。

「お・・・お前ら・・・」

不覚にも感動を覚えて泣きそうになった。

「あれ？隊長、泣いてるんですか？」

「な、泣いてない！！」

くそう、こいつら泣かしてくれんじゃねえか。

「でも隊長・・・どうするんですか？」

「・・・お前達はどうしたい。投降するか？」

それまでの和やかな空気は一変し、重苦しい雰囲気になる。

その空気の中、颯馬が一番信頼している部下、竹山がおもむろに口を開いた。

「俺は抗うつもりです。陛下のため、日本のため、その覚悟をアメリ

リ力軍に見せつけてやりたいです。」

「そう・・・だな。」

「投降するぐらいだったら、ここで腹を切りたいです。」

「俺達は皇軍、最後の一兵まで！！」

「新生日本のため、先駆けて散る。まさに本望です。」

「本当にいいのか？もし投降したいという奴がいてもだれも責めないぞ。これは個人の権利だ。」

しかし颯馬の言葉は50人全員が否定した。

「・・・そうか。よし、俺に旭日旗を貸してくれ。」

颯馬は受け取った旭日旗を目一杯掲げて叫んだ。

「天皇陛下万歳！！愛する日本のため、命を賭して最後の一兵まで戦え！！」

颯馬のその言葉に硫黄島全体を揺るがす大歓声が挙がった。

- - - - -

「敵？」

「残り一部隊とのことです。」

「率いる将は？」

「天城颯馬という名の者です。」

「天城・・・そうか、彼か。この場で散るには実に惜しい人材だな。」

「ニミッツ長官。敵はどうやらバンザイアタックを敢行したようです。いかがなさいますか？」

「決まっている。彼らの武士道を汚すわけにはいかない。正々堂々、真正面から迎撃しろ！！」

- - - - -

飛び交う銃弾。

何人もの兵士たちがその凶弾によって倒れていく。
敵味方の区別なく。

「後藤、佐山！！・・・くそっ！！」

俺は部下の亡骸を見送りながら敵兵に向かって突進していく。
俺が手にしているのは旭日旗と名刀「菊一文字」
その刀を使って俺は敵兵を切り殺していく。

「竹山！！無事か！？」

「隊長こそ無茶しすぎないでください。」
俺たちは塹壕に身を隠しながら会話する。

横目をやると7、8人が同じように塹壕に身を隠している。

俺は大きく深呼吸するとまた突撃しようと意を決した。
塹壕から飛び出し、敵兵に向かって突っ込んでいく。
後ろに目をやると全員、俺と同時に突撃していた。

・・・刹那、俺の身体を銃弾が貫いていった・・・

俺は脱力して地に伏せた。

すると温かいものが俺から流れていくのがわかる。

どんだん地が朱に染まっていく。

・・・まだ意識は辛うじて残っていた。
頑張って顔を上げてみると、俺の戦友達が同じように倒れていた。
軍服を赤く染め上げて。

「皆、ごめんな・・・」

俺の涙交じりの声は俺の意識と共に失われていった。

二話 天 我が材を生ずる 必ず用あり

目が覚めた。

普段ならば疑問に思うようなことではないのだが・・・

「俺って八手の巢にされたよな？」

呼吸も正常だし、脈もある。

・・・軍服は血だらけだが。

「ていうかなんだこの真っ白な空間は？」

「私がこの場に貴様を呼んだのだ。」

突如、背後から声をかけられたので俺は驚いて身体の正面を後ろに向ける。

視線の先には釈迦みたいな（？）格好をした女性が立っていた。

「私は神だ。」

「・・・」

「貴様、なぜ私から距離をとる！！」

「新興宗教団体の方ですか？」

「そのような類のものではないわ！！」

「珍妙な装飾品まで身につけて・・・本格的なコスプレですね。」

「私だっけつてたくてつけている訳ではないわ、阿呆！！」

「そんなにいうんだったら、あなたが神様だという根拠を見せて下さいよ。」

俺は付き合ってられないというため息交じりにそう言った。

「その言い方が妙に癪に障るが・・・致し方なかつた。」

ふうる大きく息を吐いて自称（ここ重要）神様は

「私は人の心が読めるのだ。」

と言った。

「その胡散臭いものをみるような眼はなんだ!!」
事実胡散臭いし、しょうがないじゃないか・・・。

「貴様・・・巨乳好きだな。」

!!!!

「なんでわかつたんですか!!」

「ふむ・・・且つ年下が好きなのか・・・。」

「それ以上、俺の性的趣向を探るのはやめて!!」

まじでこの人、俺の心を読んでるよ!!

て言うかなんでわざわざそんなプライベートな部分を公表したんだ・
。。。

「これで私が神だということを信じたか？」

「・・・はい。」

俺はうつむきながら返答する。

こんな意地の悪い神様なんていてたまるか!!・・・と言いたいところだが、

俺の兄貴と姉貴しか知らない俺の秘密を知っていると信じざるを得ない。

それにあの二人から俺の秘密が漏れることはあり得ない・・・。

「聞きたいんですが、どうして俺をこんな所に呼び寄せたんですか？」

俺はそう言って本題に入る。

この人が神様なのはわかった。

でも俺をこの場に呼んだという理由が全く分からない。

「私には人外の能力がもう一つある。」

「？なんですかそれは？」

そのもう一つ的能力が

「私は人の運命を変える事が出来る。」

文字通り俺の運命を変えた。

- - - - -

「皆・・・ごめんな。」

この男は涙を流している。

己の身は己の血で侵され、痛みにもがいているというのに。

私はそれまで人類が理解できなかった。

他の種を蝕み、蔑み、傷つけ、奪う。

そして同族をも己の利益のために平気で殺す。

この種は滅ぶべきだ・・・そう考えていた。

だがしかしこの男は友の為に涙を流している。

己にも死の恐怖が迫っているというのに。

この男の背から伝わってくるのは無念という気持ち。

・・・この男はまだ死ぬべきではない。

その思いが私をこの行動に駆り立てた。

- - - - -

「運命を・・・変える？」

俺は硫黄島で死んだ・・・。

その運命を変えらるということか？

「そういう事になる。」

「・・・具体的に話して下さい。」

「まだ私はこの力をうまく使えんのだ。・・・貴様には永禄元年の日本に転生してもらう。」

永禄元年、西暦に換算すると・・・

「1558年だな。」

「戦国時代じゃないですか！！！」

俺は頭を抱えてしまう。

なんでよりによって！！

「よし5秒後に転生完了だ！！5・・・4・・・」

「早っ！！」

走馬灯にふける時間ぐらくださいよ！！

「3・・・あと言い忘れていたが・・・2・・・」

カウントダウンも佳境に差しかかる。

「1・・・貴様の知っている戦国時代とは違うからの・・・0！！」

「0までカウントしちゃったら6秒ですよ！！」

そこまで言い切った後、俺は神様の前から姿を消した。

「颯馬よ・・・貴様は戦国時代で自分を変えてこい。」

・・・最後の神様の声は聞こえるはずもなかった。

三話　　く天知る、地知る、我知る、子知るく

平清盛の体を蝕んだのは、当時流行していた風土病のマラリアだったと考えられている。

以前も大病を患い、危篤状態に陥りながらも奇跡的な回復を果たした清盛だったが、今度ばかりはそうはいかなかった。

『平家物語』は、その時の彼の深刻な病状を次のように綴っている。

「熱病にかかつて以来、湯水もろくに喉を通らず、まるで体は火を焚いたように熱くなるばかり。（中略）比叡山から千手井の名水を汲んできて石の水槽に満たし、その中で体を冷やしても、逆に水が湯になってしまうほどだった。」（現代語訳）

事実を誇張して描いているのは明らかだが、清盛の臨終における痛みと苦しみは、十分すぎるほど伝わってくる。

「天城よ…、そこにおるか…」

「どうなされました？清盛様」

「七ツ島に…我が財を…隠してある」

清盛は苦しそうに息を切らせながら必死に言葉を紡ぐ。
そして天城という傍らに立つ男の手を強く握りしめた。

「平氏は…滅びぬ。必ず我らが子孫が…100年、200年かかるうとも…日ノ本を泰平の世に…導いてくれるはずじゃ。そのための老人からの…些細な贈り物だと…伝えてくれ」

「清盛さまの血を継ぐ者たちですよ。必ず成してくれます。それが氏の子孫も傍らに立っていること故、ご安心召されよ」

そう言つて天城は、清盛に対して優しく笑いかける。
それをみた清盛の方も笑顔を見せる。

「そして、天城よ。余の法事や供養は…一切しなくてよい。その代わりに…頼朝の首を刎ね…我が墓前に…備えよ」と、清盛は最期にいい残した。

それこそが最高の供養であると言いたいのだろうが、まさに一人の武士に徹した壮絶な遺言ではないだろうか。死後の極楽浄土行きを願い、念仏を唱えながら息絶えていく貴族とは、死に様まで正反対だったのが、平清盛という人物だったのだ。

治承5年閏2月4日（3月20日）、清盛はついにこの世を去った。波乱万丈だった人生にある意味ふさわしい、苦しみぬいた末に迎えた死だった。

彼の願い空しくその4年後に平氏は滅亡する。

頼朝の首を墓前に供えるという彼の願いは空に落ちた。

桜舞う春の季節。

満開の桜の木の下に、艶やかな黄金の長髪をなびかせる少女がいた。「清盛公、見ててくださいませ。私はあなたの血を継ぐものとして、必ずやあなたの大願…日ノ本を泰平に導いてみせます。その為にあなたの財、存分に使わさせてもらいます」

彼の死から約400年後、戦国の世で一人の少女が決意を新たにする。

彼の…平清盛という巨星の宿願を叶えるために。

四話 〽信を信ずるは信なり、疑を疑うもまた信なり〽（前書き）

初めまして。ポートルスです。

四話目にして自己紹介ww

サブタイトルは古代中国の名言を取り扱っています。

この言葉を取り扱ったのは性悪説で有名な荀子ですね。

四話 〽信を信ずるは信なり、疑を疑うもまた信なり〽

旧国名、能登。現代では石川県。

応仁の乱以後もこの地を治めていたのは大名家は畠山氏だった。

しかし永正5年、家臣であつた荒神久良がクーデターをおこし、能登国全土を占領。

畠山氏は越中にその身を追われた。

久良がクーデターをおかした理由は、畠山氏が悪政を敷いていたためと考えられている。

苦しめられる領民たちを放つてはおけず、意を決して行動したのであろう。

そして悪政からの解放者と言う喝采を浴び、久良は領民から絶大な支持を浴びる。

そして彼は能登国を治める戦国大名として、乱世に名乗りを挙げた。

—— 天下を統一する為に ——

前述した話は俺が『転送』させられた世界の歴史である。

転生ではなく、転送だったのだ。（ここかなり重要）

服だつて軍服のままだ。

…洗濯したので血は洗い流されているが。

「なぜ着物を着ないの？」という質問は心の中に封印しておいてくれ。

…後で話す。

話が脱線してしまって申し訳ない。

実は先程の話には続きがある。

久良は永正14年に没した。

その後、荒神家当主の座を継いだのは長男の荒神春良だった。

彼も先代の久良と同じく善政を敷く。

そして彼は、久良が内政に力を入れていたのに対し、対外出兵を度々行った。

結果は西部越中、加賀の一部を占領。

その武勇を近隣諸国に轟かした。

しかし彼もまた病魔に侵される。

「鬼春良」と言われ畏れられた武勇を誇る春良でも病に打ち勝つことはできなかった。

永禄元年、荒神春良、没。

彼の死後、遺言状が発見された。
内容は世継についてだった。

春良に男児はいなかった。

しかし穏やかな慈愛と毅然とした厳格さを併せ持つ長女の境良ならば、荒神家当主の座を継ぐにふさわしい。

大多数の家臣はそう思っていた。

が、遺書の中身を確認すると全員が驚きの声を挙げた。

「都良に当主の座を禅譲する」という内容だった。

都良は春良がある日突然養子にした女子だ。

そして出自については全く不明なのだ。

そんな都良を一部を除く家臣達は冷遇した。

これには、初見の都良の汚らしい格好への侮蔑の意味あり、政治、軍略、武芸などあらゆる面で際立った才能を見せ付ける都良を畏れてという意味もあった。

そして都良は能登国、西越中国、加賀国北部を領有する荒神家当主となった。

が、境良支持の保守派家臣はそれを認めず、境良を反乱軍筆頭として祭り上げ、七尾城以外の能登国の城を全て占拠し反旗を翻した。後の世に語り継がれる「能登渦中の乱」である。

窮地に立たされる都良。

しかし彼女は有能な臣下を率い、兵力で勝る境良方の軍勢を次々と撃破していく。

そして領内に侵攻してきた東越中の神保氏、加賀全土奪回を目論む金沢御坊の軍を圧倒。

その縦横無尽の活躍ぶりをみて、境良側の家臣たちは震えあがり、境良を見捨てて、遠国の地へと逃げ落ちた。

そして現在、形勢は逆転。

都良軍は8万にも上る兵力。対する境良軍は数百。

しかも都良軍は農民兵を徴用しておらず、全員が都良に忠誠を誓っている歴戦の傭兵である。

圧倒的不利の荒神境良。

そんな状況が続いているのが能登国の現状である。

正直言つて、俺は全く笑えない。

…なぜかって？

理由は簡単。

俺は境良方の城に住んでいるからである。

四話　　ゝ信を信ずるは信なり、疑を疑うもまた信なりゝ（後書き）

説明的文章多いなゝ今回。

五話 〽君子は必ず その独りを慎むない〽（前書き）

君子は、一人でいるときにも、必ず自らの言行を慎むものだ。

今回も駄文でお送りしますww

五話　　ゝ君子は必ず　その独りを慎むないゝ

「はぁ・・・」

俺は縁側に腰をかけながら、また大きなため息をついた。

ため息をつく分、幸せが逃げていくのだとしたら俺の身には、この先きつと不幸な出来事しか起きないだろう。

一か月前、俺は境良様に救われた。

…いつの御時世も空腹は苦しいものだ。

改めてその苦しみを認識し始めた時に、境良様は俺に救いの手を差し伸べてくれた。

奇異な格好をしている俺に、城で手料理を御馳走してくれたのだ。

境良様は領民や家臣に対しては慈愛の心で接していた反面、自分に對しては非常に厳しい。

無論、それは人の上に立つ者としては必要なものである。

この一ヶ月間で固めた俺個人の境良様の評価は非常に高い。

が、その境良様さえも霞む程の都良様の絶対的器量。

俺自身一度も会ったことはない。

すると、そんな事を考えている俺に一人の少女が近づいてきた。

「…兄者」

この少女の名は宮本武蔵。

あの『二天一流』の宮本武蔵である。

二週前、城下町で困り果てている所を助けた時から、妙に懐かれてしまったのだ。

そして、何よりも驚いた事は、あの宮本武蔵が、可憐な少女だったことである。

当初は驚き驚いたが、「お前の知っている世界とは違う」みたいな

事をあの神様が言っていたのを思い出すと、落ち着きを心内に宿すことができた。

聞く話によると、『越後の軍神』上杉謙信、『甲斐の虎』武田信玄といった名だたる戦国大名たちも女性らしい。

…要は女尊男卑の世界なのである。

男としては肩身の狭い思いを強いられてしまう。

そんな事を考えていると、また大きなため息をついてしまう。

「…今の行為は、失礼だと思う」

「あ、いや、そういう訳じゃないんだ」

どうやら武蔵は別の意味として受け取ってしまったらしい。

慌てて俺は身振り手振りで否定する。

「幾分まずい状況だなあ…と」

そんな俺の言葉に武蔵は憮然とした表情で俺に言葉を返す。

「…あきらめるの？」

「そんなことはない」

即答だった。

その俺の反応に武蔵は眼を見開いて驚く。

「まだ全然諦める状況なんかじゃないさ。戦力差は歴然としているがな」

俺の胸には不撓不屈の大和魂が宿っている。

硫黄島での戦闘だって、差は歴然たるものだったが、俺達は諦めずに銃をとった。

結果、俺を含む硫黄島守備隊は玉砕したが、アメリカ軍に甚大な被害を与える事が出来た。

どんなに絶望的な状況でも、屈強な信念を基に戦えば、結果は実るはず。

それは俺にとって、最早確信に近い思いだった。

そして何よりも…

「境良様は俺の命の恩人だ。あの方のために俺は身を粉にして戦うつもりだ。」

これも本心だった。

一ヶ月間、境良様は身元を詮索せずに俺を手厚く保護して下さった。その恩に報いる為に、俺はもう一度戦場に身を投じる覚悟を決めている。

「…ならば私も命をかけて刀を振るう。…兄者の為に」
同じように俺の傍らに立つ少女も決意を新たにす。

その彼女の決意に、俺は感謝の印として、彼女の頭を優しく撫でた。
「…境良様が、至急評定の間に」
顔を赤くしながら、武蔵は本来の役目を終える。
俺に伝言を伝えるという任務を。

「なら急いでいかないと」

俺は縁側から重い腰を上げると急いで評定の間に向かった。

「…」

その後ろ、武蔵が付いてくるのを確認した俺はさらに歩を進めた。

――

境良様は俺と武蔵が部屋に入った途端、急いで座らせた。
ちなみに室内には境良様以外、誰もいなかった。

俺は顔を挙げて境良様の顔をまじまじと見つめる。

一言でいえば…綺麗なのだ。

そして長い黒髪が可憐さに加え美しさを醸し出している。

正直、見とれてしまったのは事実である。
そんな俺をみて武蔵は頬を膨らませる。

「颯馬、敵方に動きがあった」

だが、今日の境良様の表情は非常に険しい。

明らかに状況は暗転したな、と俺は安易に推測できた。

「高田国安が兵を率いて、この松波乗に向かっていているらしいわ」
能登国にその人あり と呼ばれた家中随一の猛将である。

彼が手立てた軍功は計り知れない。

「ついに動いたんですねあちら側」

一ヶ月間、敵はこちら側に対して矢の一本も放ってこなかった。
それには加賀の金沢御坊攻めに苦心しているからと考えている。

「にしては妙なのよね…」

「何がですか？」

境良様の呟きが気になったので、俺は言葉をかける。

「…加賀や飛騨での戦況が傾いたとの話も聞いていない」

「それなのよ。猫の手も借りたいぐらいなのにな」

俺の問いに武蔵が答える。

そしてその武蔵にこたえる手間が省けた、と境良様は感謝し、続きを話した。

現在、都良様は加賀攻めと同時に西越中を経由して、飛騨にも侵略の手を伸ばしている。

ただでさえ、軍を2面に分け、兵站線の確保に必死なのに、
さらにもう一つ戦線を作成するのは都良様が望むものではない。

「たかが1000…と言いたいところだけど、国安が率いているのは精鋭中の精鋭。」

「境良様はどうなさるおつもりですか？」

聞きたかった。

単純に問いたかった…。

なぜならば境良様が…霞んで見えたから、その存在を確認したかった。

その俺の問いに境良様は押し黙る。

しばし後、ゆつくりと口を開いた。

「颯馬、あんたは逃げなさい。武蔵と一緒にね」

「なっ!?!」

その言葉に俺は立ちあがって無言の抗議をする。

全く予想だにしない言葉が、俺の鼓膜を擦ったからだ。

「何も関係のないお前を巻き込むのは気が引ける。だから今すぐ…」
彼女は他人に優しく自分に厳しい。

恐らく彼女がとうとうとしている行動はただ一つ。

…すぐに見当がついた。

確かにそうすれば俺と武蔵を含むみんなの命は助かるだろう。

境良様を除いて。

そんな事…俺は納得できるはずがなかった。

「…私と兄者は刀をとる覚悟をしている」

武蔵が俺の気持ちを代弁する。

「だがそんな事をすればお前たちは…」

「構いませんよ。」

俺の言葉に境良様は驚く。

「武蔵はともかく、俺は鏡好様に命を救われた身です。ならば命を

かけるのは当然のこと。」

「…颯馬…」

「じゃあ俺たちは戦の準備をします」

俺と武蔵は立ち上がり部屋のふすまを開ける。
早くこの部屋を出ていきたかった。

俺は彼女の涙をみたくはない。

それが喜怒哀楽のいずれかは分からない。

ただ…見たくなかった。

五話 〽君子は必ず その独りを慎むない〽（後書き）

はい、寝ぼけながら執筆した駄文でございます。

自分は先日文化祭があつた身なので本日は代休日。
なので今日は朝7時から夕方6時まで爆睡。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5231v/>

戦極姫 ～戦乱で沸き立つ大和魂～

2011年11月12日10時40分発行